

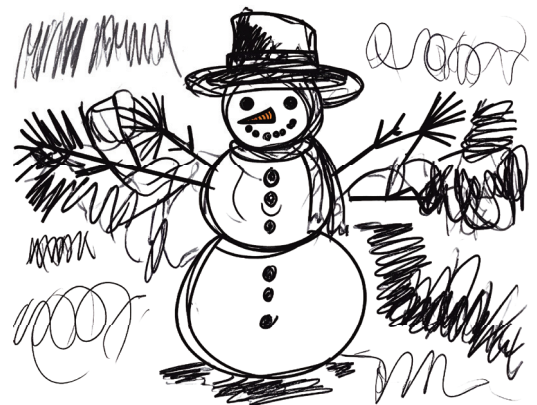
ベデジャーになる



OG/OB と学生を結びながら、懐かしさと新しさ香る筑波の風を季節の便りとしてお届けしていきます。

INDEX

1. 大学4年間の気づき / 川上 真生
2. 大学生活振り返り / 加藤 緑
3. しゅしゅっと就活 / 山田 久美子
4. 卓球のおもしろさ / 結城 希



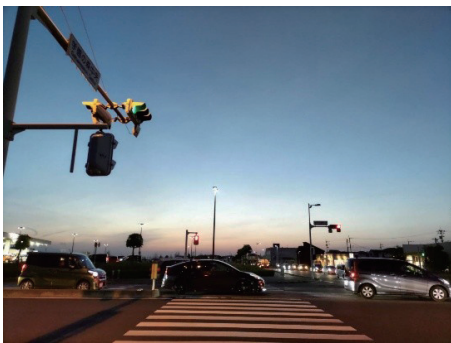
1. 大学4年間の気づき



■慣れへの抗い方

2月下旬の午前10時、眠い目をこすりながらエコノミークラスの狭い座席に腰を下ろした。離陸まで残り30分ほどだ。「これから出国。いざマレーシアへ」飛行機の外観写真とともに最低限の文章を家族に送り、機内モードに設定した。カバンから2冊の本とノートを座席ポケットに入れ、荷物を整えたら長いフライトの準備完了だ！前夜にほぼ徹夜で荷造りをしていたので、欲求に素直な体の眠気はピークに達している。無事間に合った安堵感も相まってすぐに目をつぶった。飛行機に乗る恐怖もワクワクもかつてほどは減り、何の抵抗もなく睡眠に入ろうとする素直な自分に驚く。フライトはこれで何回目だろう。大学進学後、東京と地元広島との行き来で飛行機を使うことが多くなった。この4年間で電車に乗る感覚とまではいかないけれど、飛行機そのものへの慣れがぐっと進んだ気がする。小6の沖縄旅行で初めて飛行機に乗った時は「墜落して死んでしまうんじゃないか」と前夜から全く眠れずそわそわしていたのに。この社会に生まれて、22年。新しくできるようになることは次第に減り慣れが進んでいく。変化にも鈍感になる。しかし、そこから一步踏み出してみればそれらが新鮮に思え、世の中の見え方が変わる。大学4年間の振り返りの気づきだ。

■広島を離れて感じた違和



空が広いことに驚いて思わず撮影したつくばの夕暮れ時。日付は宿舎入居から3日後の2022年4月6日となっていた

2022年の春から筑波大生のご多分に漏れず宿舎暮らしを始めた。広島市から約880キロ離れたつくば市。早々に違和を感じたのは、山の少なさと日の入りの早さだった。自転車で移動しても移動してもはるか遠くにそびえる筑波山しか見えない。体に染み付いた感覚ではまだ明るいはずなのにいつのまにか真っ暗になる。実際には広島とつくばで約30分の差があるそうだ。空が広いぶん夕焼けが綺麗に見える西の空を見ながら、異郷の地に来てしまった不安とこれから始まる一人暮らしへのわくわくが胸に入り混じっていたのを覚えている。

■最初にできた宿舎友だち、T君

最初にできた友達と言える友達は栃木県真岡市からやって来たT君だった。あえて、そのような表現をするのは今でも連絡を取り続けているからだ。最初は寂しさを紛らわしたい気持ちと友達を作らないと出遅れてしまうのではという焦りもあって、出会った同期の1年生とよくLINEを交換した。しかし、連絡を取っていたのは最初だけで、今では疎遠になっている知り合いが何人かいる。トーク履歴を見返すたびに「今は何をしているのだろう」「元気にしているかな」と気になる。T君の話に戻る。彼と出会ったのは平砂4号棟3階の補食室（いわゆる共用キッチン）だった。自分は世間でいう人見知りに入っていると思っている。積極的な自己開示が苦手な聞き役に徹することがどちらかというといふ。彼は出会ったそばから頭の回転の早さを感じ

させるテンポで次々と話題を発し、話が尽きないので自然と仲良くなった。同じ男子校出身だったのも大きいかもしれない。中でも近くの女子高の生徒に告白して盛大にフラれた話を恥ずかしがることなく、軽妙に語っていたのが強く印象に残っている。自分の失敗を話のネタとして昇華するタフさと話し相手を楽しませようとするエンターテインメント性を兼ね備えた彼を率直にすごいと感じたものだ。

■大学生の人付き合い

また、大学生になってから人付き合いという点で気づいたことがある。それは自分から行動することがより重要になるという点だ。高校生までは教室という狭いコミュニティの影響が良い意味でも悪い意味でも大きい。合わない人とも仲良くしなければならないことはあるものの、誰かと友達になれる確率が高い。休憩時間や給食、掃除など定められたカリキュラムの中にコミュニケーションする機会が自然と生まれる。しかし、大学は自由だ。授業に行くのもサークルに入るのも自分の意思一つでどうにでもなる。だから、友達を作ろうと自分から行動しなければ、本当にできないのだ。その勇気を振り絞って行動を起こしたとしよう。その次に待ち受けるのが、共通の話題という壁であった。

高校時代は大体の生徒が広島市（とその周辺部）という限られた範囲で生活しており、自然と話題が広島市に関するものが多かった。どんな話をしていたか鮮明に覚えているものは少ないが、思いつくものを少し挙げてみたい。例えば、「カープは開幕戦黒星の年だとシーズン全体の成績は良いので開幕日の今日の試合は負けてほしい」「近隣の高校に生物基礎で習うミトコンドリアを『ミト・コンドリア』と変な抑揚で教える教員がいる」「広島は共政会という暴力団が幅を利かせているので、山口組系がいないらしい」などである。男子校だからなのかは知らないが、とにかく少し変わったやつが多かった。

筑波大に入学すると、「共通テストのあの問題はこう解いた」「進学校の〇〇出身なんてすごい」など勉強や高校、学歴に関する内容が多くなり、話題の幅や種類が変化したように感じた。「自称進学校」（現役の高校生や卒業生が自虐的、あるいは皮肉を込めて自身の通う学校を表現する際に用いられる言葉）を知ったのもこの頃だ。

そして、全国の津々浦々から学生が集まるのも筑波大の特徴だ。北は北海道の釧路、南は沖縄の離島まで幅広い出身者と巡り合い、これまで自分は井の中の蛙だったのだと痛感させられた。人それぞれ生まれ育った地理や気候、習慣が違い、高校のカリキュラムでさえも共通ではない。これまでの前提や常識が通じない不安があった一方で、心を通わせることができた先には思いがけない出会いもあった。

■卒業旅行で訪れたマレーシア

卒業旅行の行先としてマレーシアに行こうと決めた。理由は筑波大に短期留学していたR君に会うためだ。彼とは英語開講の国際援助に関する授業で出会った。たまたま席が前後で日本語が堪能なR君は、英語が不慣れな自分に授業内容を日本語に訳して教えてくれた。それがきっかけで親しくなり、筑波山や地元の広島を案内するほど仲良くなった。今回は2024年の2月に母国へ帰る彼と別れて以来の再会だ。到着が1時間近く遅れたにもかかわらず、空港でこやかに迎えてくれた。なんだか少しふくよかになったように見える。聞けば、帰国後8キロも増えたらしい。「日本にいた時は自転車で移動していたけど、マレーシアは車移動なので全く運

動をしなくなったから」だという。

移動には車をよく使う。R君の家族は父と母と自分用で計3台の車を所有している。マレーシアでは1人1台ずつ車を持つことは決して珍しいことではないみたいだ。鉄道はクアラルンプール近郊しか発達しておらず、バスも時間通りに来ない。だから自然と車移動という選択肢になるそう。経済的に裕福な華人は車を所有することが多い

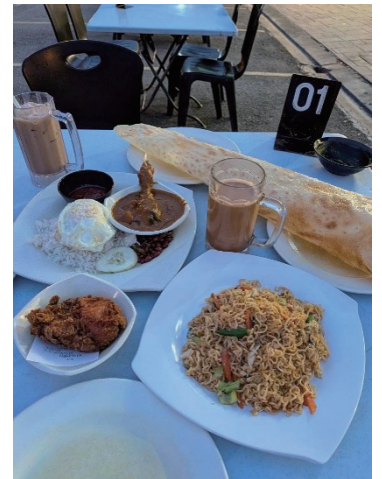


骨を咀嚼する野良犬。どこかたくましそうに見えた

一方で、バイクに乗っているほとんどがマレー系の人たちだった。経済的な格差が民族間にあるのだ。マレーシアで目の当たりにしたのは多民族国家が共存する上でのすみ分けだった。教育システムの観点ではマレー系の方が優遇されている。R君によると、国立大学の入学枠は人種に応じて振り分けられているそうで、約65%が（先住民のブミプトラを含めた）マレー系、残りの約35%が華人やインド系を含めたそれ以外の人種という区分になっている。合格したマレー系の学生より成績が良くても華人の場合は枠が狭いため不合格ということは頻繁に起こるのだという。多民族国家だからこそ、現実には横たわる複雑な格差と不平等を突き付けられ、それに抗う努力の感覚が日本とは全く違うのではないかと感じた。

マレーシアでは野良犬をよく見かけた。日本では見かけることはほとんどない。滞在中のある日、インド系イスラム料理のお店を意味するMamak（ママック）のテラス席で夕食をとっていると、1匹の野良犬と思しき大型犬が寄ってきた。R君が食べ終わったフライドチキンの骨を投げ与えると、バリバリと音を立て咀嚼していた。同様にナシレマ（ココナッツミルクで炊いたごはん）とセットだったチキンの骨を与えてみてもすぐに完食。しまいには食べきれなかったミーゴレン（焼きそばに似た麺料理）や甘いロティ・ティシュ（「紙のように薄いパン」を意味する）を与えてもがつついていた。料理を食べ終え、席を立つと野良犬もものそのそと立ち去っていた。柴犬が大好きなR君は「生まれ変わって犬になるとしたら裕福な家の犬がいい。この犬（野良犬）は食べ物を自分で探さないといけないから大変そう」と言っていた。僕も同感だ。でも、その野良犬の堂々とした後ろ姿がどこかたくましく見え、自由に生きているような気もした。

自由とは現在の安住や慣れあいから決別して、厳しさを承知の上で一步踏み出すことなのではないか。その先にそれまで想像しなかった新しい何かがある。もし、筑波大に進学していなかったら、英語開講の授業を履修していなかったらR君と出会えていなかった。今こうしてマレーシアを訪れることはなかったかもしれない。失敗を怖がることなく新たなことに挑戦することの連続が自分の世界を広げてくれる。そんな気づきが得られた4年間だったように思う。



左奥にあるのが「ナシレマ」で、その隣にある細長いパンが「ロティ・ティシュ」、手前の麺料理が「ミーゴレン」

■おわりに

これまでペデジャーなるをご覧いただいた皆様、本当にありがとうございました。大学2年時から執筆を始めて、(今回含め)計9本の原稿をお届けしました。筑波大で学生生活を送る中で、自分の思ったこと、考えたこと、感じたことを自由に発信できることが私自身とても楽しかったです。卒業生の皆様がこれからも素敵な毎日を送れるように心から願っております。

(社会・国際学群 社会学類4年 川上真生)

■参考文献

【世界のスイーツ】マレーシアのスイーツ「ロティ・ティシュ」が巨大すぎる！

<https://gotrip.jp/2015/01/16043/> (最終閲覧：2026年3月18日)

ミーゴレンはどんな味？ナシゴレンとの違いや作り方をご紹介

<https://delishkitchen.tv/articles/2447> (最終閲覧：2026年3月18日)

現地で人気No.1！ココナッツミルクで炊いたごはんナシレマ【マレーシア】

<https://ethnic-as.net/selection/gourmet/33/> (最終閲覧：2026年3月18日)

2. 大学生活振り返り



「この4年間で一番印象に残ったことは何ですか？」

先日、ある生物学類OBと話していたらこの質問をされました。

そのOB曰く、「社会人になってから繰り返す4年間で何をしたか記憶にないけど、数十年前の大学生活は今でも鮮明に覚えている。それくらい大学生活は思い出深いことばかりだ」だそうです。

光陰矢の如し。気づけばもう卒業です。この4年間は本当にさまざまなことがありました。そこで今号では一筑波大学生として過ごした4年間で振り返り、思い出に浸っていきます。

話は5年前にさかのぼります。進学先について進路指導部の先生に相談しました。呼吸や光合成などの生命活動に魅せられた高校2年生の筆者は生命科学を専攻すると決意しました。その時の自分の学力と高校の進学実績からいくつかの志望校候補をリストアップしましたが、その中に筑波大学はありませんでしたし、存在すら知らなかったです。

「研究がしたいなら、筑波はいいところだよ」

その先生の一言が筆者の人生を変えたと言っても過言ではありません。そこから筑波大学についてゼロから調べました。研究分野や緑豊かなキャンパス、そして国際的・学際的な学修環境、まさに筆者が理想とする大学そのものでした。

その日から筑波大学を第一志望にし、受験勉強に励みました。

迎えた合格発表日、緊張した気持ちをグッと抑え、自宅で合格発表のウェブページにアクセスしました。自分の受験番号を見つけ、すぐに親に知らせようと立ち上がりましたが、足に力が入らず、壁と手すりなどでなんとか体を支えながらふらふら階段を下りました。この場面はなぜか脳裏に焼き付いています。

晴れて自分の高校初の筑波大学進学者となり、知り合いが一人もいない茨城県つくば市にやってきました。

入学当初は事務手続きや履修申請などでバタバタしていた一方、友達ができるか不安だったため、学類やサークルの新歓にたくさん参加しました。今になって思うと筑波大学には1.6万人以上の学生がいるのだから、どんな人でも意気投合する仲間を見つけられるのでそんなに焦る必要はなかったですね。

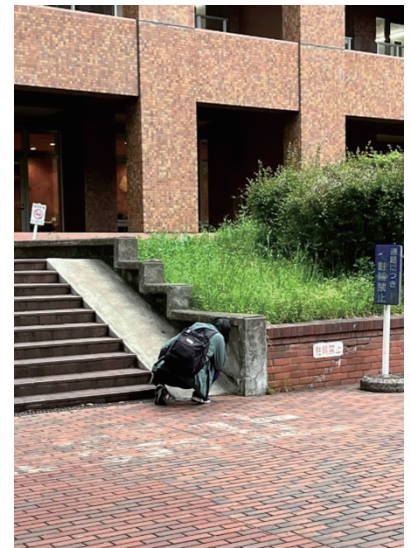
1年生の頃はまだ新型コロナウイルスが猛威を振るっていて、オンライン授業が多かったです。筆者は宅通して週に2、3回大学に来ていました。宅通は実家に帰ればご飯があったり家事を分担してもらえたりして楽な面が多いですが、筆者はそういうことよりもすぐに大学に行けたり、友達と気軽に会えることに憧れていました。

紆余曲折ありましたが、2年生に上がるタイミングで一の矢学生宿舎に引っ越し、待望のつ

くばライフが始まりました。通学時間が片道2時間から6分になった時はさすがに感動しました（[2023年度春号参照](#)）。

学業について言うと、入学したての頃は「生物漬けの日々を送るんだ！」と意気込んでいましたが、その勢いは間もなく消滅しました。1年の5月に筑波大学新聞編集部に入部し、その活動に明け暮れていました。講義で一方的に教授の話聞くより、教職員や学生にいろいろ質問しながら書きたい記事の情報をゲットしていくほうが圧倒的に楽しかったのです。また、現場に出て雰囲気を感じ、道行く人に突撃取材するのもそこでしかできない体験でした。

「大学で良い成績を取ってもなんの役にも立たない。それより新聞活動でコミュ力や文章力などを身につけたほうがよっぽど役に立つよ」という先輩の言葉を信じ、学業にはまじめに取り組まなかったです。その先輩は確かに成績が全く関与しない道に進みました。しかし筆者の場合はそういうわけにはいかず、後に成績が関係してくる重大場面が数回あり、その都度痛い目に遭いました。



第二エリアで昆虫を観察している筆者

学業にはまじめに取り組まなかったものの、生物学に対する興味関心はずっと持っていました。入学当初は漠然と「生命科学の研究がしたい」と思っていました。生物学のさまざまな分野に触れていけば徐々に興味のある分野を絞っていき、最終的には取り組みたい研究テーマに出会えるだろうと考えていました。

しかしさまざまな分野の講義や実習を受けると、全てが面白く、興味が狭めたどころか逆に広がりました。今まで全く関心がなかった植物生理学や生態学も視野に入り、かえってやりたいことを決めるのが難しくなりました。最初から「〇〇を解明したい」と決まり切っている同級生がうらやましかったです。

2年生の後半から諸事情で新聞活動の頻度を減らしました。若干増えた空き時間に何かしようと思っていた時に目にしたのが英国マンチェスター大学交換留学生の募集ポスターです。そういえば留学することは長年の夢でしたが、いつしかそんなことを忘れてしまうほど忙しい日々を送っていました。その時点で応募締切まであと3週間。大急ぎで書類の作成や英語の試験を受け、なんとか間に合いました。そして成績が悪かったものの定員割れしていたので審査を通過しました。



4年間の心の拠り所だった松美池

留学審査に合格したのはよかったのですが、奨学金審査には落ちました。学業をおろそかにしていたツケが初めて回ってきました。どれだけ後悔しても取り返しがつかないため、頑張っただけ稼ぐしか道はなかったのです。3年の7月から授業がなく、実質夏休み状態だったためすぐに宿舍を退居して実家に帰り、生活費を抑えました。それと同時に都内に「出稼ぎ」しに行っていました。イベントスタッ

フのアルバイトをされていて、毎日異なる現場で朝から夜まで働きました。一番大変な時は始発で行って終電で帰宅、という生活を3日間続けたことです。そのイベントでスタッフに出された弁当から食中毒が発生しましたが、筆者は幸いにも当たらなかったです。

必死にアルバイトしていると同時に筑波大学マレーシア校の取材準備とイギリス留学準備も進めました。これほど大変な時期でしたが、どうしても行きたかった生物学類の実習二つに申し込み、夏休み期間中は下田臨海実験センター（静岡県）と菅平高原実験所（長野県）でそれぞれ1週間過ごしました（[2024年度夏号参照](#)）。



留学先のマンチェスター大学キャンパス

マレーシア取材は無事に終え（[2024年度秋号参照](#)）、そのまま日本に帰らずイギリスに直行しました。しかしマレーシアを飛び立つ前に取材班内でインフルの集団感染が起こり、筆者も免れませんでした。弱った体と二つの巨大スーツケースを連れてなんとかイギリスまでたどり着きました。出だしこそ順調ではなかったものの、その後の留学生活は大変充実しました。そして2カ月ほど経った時にまさかの骨折で入院までしました。人生初入院をイギリスで体験したわけです（[筑波大学新聞第387号14面に関連記事](#)）。

10カ月間の留学生活が終わり（[2025年度春号参照](#)）、帰国早々待ち構えていたのは大学院受験でした。筆者が進学したいプログラムは夏の1回しか募集がないため、逃したら終わりです。しかしその時点で単位が足りないため卒業が見込まれず、出願に必要な卒業見込証明書を発行してもらえなかったです。最終的には学類長の寛大な対応に救われました。

大学生の最終学期は卒業研究をしながら学内のイベントに参加したりプチ旅行に行ったりして過ごしました。卒業研究発表会が2月下旬に開催され、そこで無事に研究成果を発表することができ、卒業に必要な事項は全てクリアしました。

こうして振り返ると、山あり谷ありの4年間はたくさんの人に恵まれ、運が良かったです。ここで冒頭の質問に戻ります。筆者は答えられませんでした。なぜなら印象に残っていることが多すぎて決められなかったです。しかしこの会話には続きがあります。

「もう一度受験生に戻ったら、筑波大学を選びますか？」——筆者は即答しました。

（生命環境学群 生物学類4年 加藤緑）

3. しゅしゅつと就活



就職活動で「自分を表す1枚」を求められた際に提出していた写真です。本当は証明写真を載せようと思ったのですがバックナンバーがWEBに残るということで恥ずかしくなりやめました。

寒かった冬の終わりをを感じる暖かな日差しが差し込む今日この頃、皆さんいかがお過ごしでしょうか。例に漏れず締め切りギリギリに原稿を書いている山田です。今回は就職活動について、色々書いていくことができたと思います。なお、この原稿を書いているのは2026年の2月末です。このことを踏まえて読んでいただくと、より今の就職活動のスピード感を実感することができると思います！

私は今大学4年生です。しかし、2026年秋～2027年春までの1年間休学する予定です。そのため今年卒業していく同期はいわゆる「26卒」として入社するのですが、私は「27卒」として入社します。つまり、今が就職活動真ただ中なのです……！

本来「就職活動について」と題打った文章は入る会社が決まってから書くと思うのですが、今の私のメインタスクが就職活動すぎて、このアツい思いを書き記しておこうとなった次第です。来年の私がこの記事を見返し、間違った方向へのアツさに頭を抱えるかもしれませんが、今は見ないふりをします。ごめんね未来の私！

・就活時期について

厚生労働省が発表している「大学等卒業・修了予定者の就職・採用活動時期について」を参考にすると、2027年度大学等卒業・修了予定者の就職活動日程は以下のルールが原則とされています。

広報活動開始 : 卒業・修了年度に入る直前の3月1日以降

採用選考活動開始 : 卒業・修了年度の6月1日以降

正式な内定日 : 卒業・修了年度の10月1日以降

私は26卒として軽く、27卒としてがっつり就職活動に取り組んでいるのですが、このスケジュール通りに就職活動が進むのなら、私は26卒として新卒入社できていたと思います。今年度、私はサークルの大会に出場した関係で就職活動に本腰を入れ始めたのは10月でした。この時点で周囲の学生よりかなり出遅れている感覚があったことを覚えています。現に、11月中旬に参加したインターンシップでは、同じグループの人の半数以上が夏休みの時点で複数Daysのインターンシップに参加していました。私は本稿を執筆している2月末の時点で15社ほどに27卒としてエントリーシートを提出しているのですが、12月～2月の間に本選考のエントリーシートの締切があり、今も何社かで面接の予定があります。また、ありがたいことに内々定をいただいた企業が既にあるのですが、この連絡は1月末にいただきました。大学4年

生、つまり卒業する年度の6月から選考開始というのはこの状況を踏まえるのにわかに信じられません。私が受けてきた選考は幻だったのでしょうか。幻だったら困ります！

・流れについて

就職活動の時期について、ただの学生にすぎない私が実状とのズレを指摘したところで私の就職活動がスムーズに進むわけではありません。学生の今は文句を言いながら従い、社会人になっても気にかかるようならこの仕組みを変えるような仕事に就くことを目指した方が良いでしょう。ということととにかくがむしゃらに就職活動をしています。

〈エントリーシート〉就職活動でまず壁として立ちはだかるもの、それはエントリーシートです。昨年度、26卒として就職活動をしていたときはエントリーシートでほとんど落とされていました。今振り返って考えると、「そりゃ落ちるな〜」と思います。ネットで「待遇がいい」「全員受けよう」と書いてある会社や給料がいい会社に手当たり次第出していました。会社の事業内容や仕事として取り組むこと、会社の雰囲気などをほとんど掴んでいない状態で書き、提出していたように思います。企業の人事の気持ちになると、「待遇だけ見て受けてくる学生最悪〜」と思います。失礼なことをしてごめんなさいという気持ちでいっぱいです。この反省を活かし、自分が本当に興味のある業界や適性がありそうな職種を、社員の方との面談や説明会の内容を踏まえた上で受けていったところエントリーシートはそこそこ通過するようになりました。うれしい。

〈WEBテスト〉おそらく、勉強あるのみです。私は一夜漬けでのWEBテスト受験を繰り返してしまっているのですが、勝率は30%ほどです。4000字にわたるエントリーシート、600字の手書き作文、A4 1枚使った自由課題の3点を提出し通過した会社にWEBテストで落ちたときは泣きました。しかも、同じくらいの文量のエントリーシートが課されていた他のもう1社もWEBテストで落ちました。これらの連絡はつい2日前に来たばかりなのでまだ心の傷は深いです。次回WEBテストを受ける前までにまずは対策問題集を1周することをここに誓います。中学受験経験者の友人は受験問題と雰囲気が似ていると言っていたので、興味がある方は問題集を買って少し解いてみてもいいかもしれません。

〈面接〉最終面接の1個手前の段階まではオンラインでの面接の場合がほとんどです。最終面接は本社や勤務予定の支社での対面面接が多いのですが、ごくまれに最終までオンラインで面接を行う会社もありそれぞれの色が見えると感じます。面接では色々なことを聞かれます。自己紹介や志望動機、学生時代に力を入れたこと（いわゆるガクチカ）、就職活動の軸などはどの業界・業種でも質問されると感じています。私はIT業界、出版業界、メーカー（地方配属）のそれぞれ営業職に興味があり受けているのですが、少なくともこれらの業界や職種では聞かれました。私にとって難しいのは就職活動の軸です。業界を見て分かる通り私は色々なことに興味があります。一つだけの軸で受けているわけではないので、毎回面接の度に緊張します。でも思うのですが、人生における軸が一つだけでずっと変わらない人って少ないのではないのでしょうか。それを無理やり一つに絞るから無理が生まれ、自分自身で選択したはずなのに後悔してしまうのではないのでしょうか。私はギリギリまで未来にワクワクしたいです。正直に色々書きすぎて、私が受けている企業の人事の方がこの文章を見たらひっくり返ってしまうのでは

ないかと思います。しかし、私の根底にはワクワクがあり、それを元に軸を決めているので一貫性は自分の中である程度保たれているので安心してください（言い訳です）。

最後に、まだ私の就職活動は終わっていないのですが今までで一番アツかった出来事について書いて締めたいと思います。

昨年末、地元長野に支社を持つ某大手子会社のインターンシップに参加させていただきました。その際、営業体験ということで仮想のお客様を想定し、社員の方が仮想のお客様役を演じアポイントを行いました。その際にお客様を演じてくれた社員の方がタンブラーを机に置いていたので、それを起点にアイスブレイクをしたところ高評価をいただけました。私は面接や発表などの失敗できない緊張する場面が非常に苦手なので、嬉しい成功体験として印象に残っています。先日、この会社の二次面接に対面で参加する機会がありました。会議室にいたのはタンブラーの彼。彼というよりナイスミドルと言った方が正しいかもしれませんが。とにかく、インターンシップの際に対応してくださった社員の方が面接官だったのです。私は自分の長所としてスターバックスのアルバイトで身に付けた傾聴力を挙げていて、コーヒーという相手の興味に絡んだ話で自分の長所を伝えられたことが非常に嬉しかったです。読んでいる漫画で完璧な伏線回収が行われたときの感覚と近かったです。実際面接官の方の反応も良く、無事最終面接に駒を進めることができました。他の質問に答えた際はあまりいい反応をしていないように見えたので、コーヒーパワーでつかんだ結果だと思っています。ありがとうコーヒー。ありがとうスターバックス。

これからの抱負としては、後悔のない就職活動をしていきたいと思っています。でも4月には終わらせたいです。夏には加藤さん（「大学生活」というテーマで今回のペデジャーなるを書いている人）とインドに行くので、その飛行機の予約までには終わらせたいなあ。ちなみに！今回の記事の名前は就活という人生に関わる重いテーマを扱うのだから名前くらい軽くしようと思ってつけました。手裏剣みたいでかわいいと思っています。

【参考文献】

厚生労働省「大学等卒業・修了予定者の就職・採用活動時期について」

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000184189_00002.html (2026/03/01 最終閲覧).

リクナビ「いつ、何をやる？就活の流れを解説！」

<https://job.rikunabi.com/contents/howto/10144/> (2026/03/01 最終閲覧).

(情報学群 知識情報・図書館学類 4年 山田久美子)

4. 卓球のおもしろさ ～サークル入って3か月～



■ご挨拶

こんにちは。長く寒く辛い冬がようやく終わりを見せ、段々春の気配を感じる今日この頃ですが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

突然ですが、私は卓球を始めました。昨年11月下旬、数年ぶりに友達と卓球をした際その面白さに気づいてしまい、もっとやりたいと卓球同好会に入りました。この原稿を執筆しているのが2月末なので、大体始めて3か月といったところでしょうか。遊びですだけだった卓球も少し本格的に取り組んでみると、最初は全然返せなかったサーブをレシーブできるようになり、球の回転やコース取りなどその奥深さに気づくことができました。



↑私が愛用している中国式ペンラケットの「サリオンC」軽くて振りやすい

そこで今回は、私の人生と卓球との関わりを振り返った上で、この3か月間で気づいた卓球の面白さやその他もろもろを紹介していけたらと思います。初心者の目線から卓球経験の有無に関わらず楽しめる記事を目指しましたので、軽い気持ちで読んでいただければ幸いです。



↑情報量が多い旧宅で卓球をする母と私

■私の人生と卓球との関わり

私と卓球との最初の出会いは小学生の頃でした。インドア派であり運動をしなかった私と兄の姿を見かねて、両親がミニサイズの卓球台を買ってくれたのです。両親が卓球部だったわけではなく、室内で体を動かせる遊びというわけで卓球が採用されました。ただそんなに熱心に遊んでいたわけではなく、たまにやる程度です。物理的に後ろに下がることはできない競技

環境だったため、ロングの球やスマッシュを入れたら最強でした。

遊びでやる程度の卓球でしたが、下手でもラリーは楽しいし、他のスポーツと比べて身体的な接触が無く、ボールも軽いため痛くないので、中学に上がった時は卓球部に入ろうと思っていました。しかし、衝撃の事実が明かされます。私が通った中学校には卓球部が無かったのです。田舎の中学校だったので1学年90人強と人数が少なかったのに加えて、サッカーや野球の人気に卓球が負けていたようです。私は結局吹奏楽部に入り、体育館倉庫には卓球台が沢山眠っていると噂でしたが、体育の授業で使用されることもなく3年間一度も学校で卓球をしないまま卒業しました。

高校には卓球部があったのですが、新しいことへの挑戦に燃えていた私はヨット部に入りました。卓球は体育の授業でたまに登場し、特に何も教えられないままクラスメイトと卓球を楽しんでいました。授業では卓球が上手い人が何人か居て、競技としての卓球の凄さの片鱗を感じていたような気がします。

大学に入ってから弓道やウィンドサーフィン、自転車や大学新聞などに夢中で、卓球サークルの存在を認識していませんでした。必修体育の志望順位は1位にしていたと思いますが、抽選に外れ受講することはありませんでした。

そんな中、何の気なしに新聞仲間や友達と卓球をする機会があり、突然その面白さを思い出しました。私は1年間休学をしていたのですが、復学してから運動する機会が減っていたこともあり、体を存分に動かすことができ楽しかったです。また、数年ぶりの卓球なのに思ったよりラリーすることができて運動をするようになった自分の肉体の可能性に気づきました。

そして、もっと卓球が上手くなったら面白いと思い、卓球サークルに参加しようと考えました。筑波大は卓球部と医学卓球部、卓球同好会（以下卓同）の三つの卓球の団体があるのですが、卓同が一番初心者でも参加しやすい雰囲気だと感じ、11月下旬に体験してそのまま入会しました。卓同は同好会という名前ながら小学～高校での卓球経験者が多く、想像よりもずっとハイレベルな卓球が行われていました。私はそんな皆さんにラケットの握り方からドライブの出し方まで色々なことを教わりながら、少しずつ卓球のイロハを学んでいる最中です。段々球の回転が分かるようになり、友達曰く「中二の夏休み」ぐらいのレベルとのことでした。

それでは次に、私が考える卓球の面白さを紹介していこうと思います。



↑妻木のハッティングセンターにはなんと卓球室もあるのです。1台30分500円、球ラケット貸出あり



↑卓球同好会の主な活動場所である第3体育館。
とても広く天井が高いため打っていて気持ちがいい。長年活動されているTさん曰く「床が衝撃を吸収してくれてとても良い」とのこと。冷暖房はない

■卓球の面白さ

「卓球の面白さは1時間の熱弁より、1分のラリーをした方が理解できる」

今思いついた格言です。つまり身体的な感覚である卓球の面白さを言葉で伝えることは中々難しいものですが、実際に卓球をするよりは文章を読む方が気軽だと思うので、できるだけ頑張ってみます。

まず、卓球には「球を打つ面白さ」があると思います。ラケットでピンポン球を真っ直ぐ捉え打った時の確かな感触や「カンッ」という音はまずそれだけで小気味良いです。また、サーブをする時も自分の思い通りの回転・コースで打てると嬉しいです。相手が打ってきた厳しいコースや速いスピードの球を打ち返せた時はすごく達成感があります。

次に、「球を受ける面白さ」です。練習や試合の相手が出すサーブやレシーブ、カット、スマッシュといった球は本当に多種多様で十人十色の癖があります。それぞれに新しい発見があり、色々な人と卓球するのがとても楽しいです。サーブを受けたり、ラリーを重ねたりするごとに相手の卓球スタイルが段々と分かり、ひいては性格や人間性といったものまで伝わってくるような気がしています。非言語コミュニケーションの一つといってもいいでしょう。本気の試合をすることは建前のない本音の会話と似ていると思います。

また、「結果が目で見えてすぐに分かる」ことも面白さの一つでしょう。卓球は自分のコートで1回バウンドした球を相手コートに入れることでラリーが成立します。ネットを越えなかったり、コートをオーバーしたりしたらアウトとなります。したがって、相手の球に対して自分が適切な角度、スピードでラケットを当てるのが出来たのかすぐに答えが分かります。特に回転がかかっている球のレシーブは、適切な角度でラケットを当てないと思わぬところに跳ねていってしまうので、まさに一問一答の答え合わせをしているようで面白いです。また、ラリーの返球一つとっても本当に多種多様な返し方があります。相手のコートに収めることが出来れば全ての球は「正解」ではありますが、同時にその球は相手への次の「問題」にもなるので、

ゆっくりで高い球を出してしまうと、速くてコースの厳しい球になって自分に返ってきてしまいます。かと言って全て攻めた球を打った方がいいと言われると、その分ミスする可能性も増えてしまうため難しい所です。卓球スタイルによっても違いますが、球を「繋ぐ」か「決める」かという防御と攻撃の目まぐるしい入れ替わりも卓球の魅力の一つでしょう。

つまり、卓球とは「お互いにラケットでピンポン球という問題を出し合い、どちらかが答えられなくなるまでラリーを続けるゲーム」と言ってもいいかもしれません。私はとりあえず返球することに精一杯で次のレシーブまで考えるのは中々難しいですが、返球のバリエーションを増やし精度を上げていくことで、もっとレベルの高い卓球ができるのだと思います。

そして「人間関係が広がる」ことも忘れてはいけなんでしょう。この3か月間、卓球を通して様々な素敵な人たちと知り合うことが出来ました。他の競技も同じですが、卓球をするには相手が必要です。最初は知らない人だらけだった卓同でも、段々名前を呼べる人が増えてきました。初対面はやはり緊張しますが、そんな時は卓球をすればいいのです。咄嗟に話す話題が見つからなくても問題ありません。

■余談 @卓球の入り口

また、余談として卓球に関する二つのエンタメを紹介したいと思います。私が心の底で卓球が上手くなりたいと望んでいたのは、これらの作品の影響が大きいと思います。どちらも面白いので興味がありましたらぜひ見てください。

一つ目が松本大洋さんの「ピンポン」です。私が見たのは漫画を原作としたアニメと実写映画だけなのですが、どちらも素晴らしいクオリティで、卓球にかける青春の熱さや試合の面白さがダイレクトに伝わってくる作品だと思います。ちなみに主人公の一人である「ペコ」は日本式ペンという表面をメインに使うラケットの持ち方ながら、当時は珍しい裏面にもラバーを貼った裏面打法を習得します。私も中国式ペンで裏面打法を使うので勝手に親近感を持っています。今はシェイクホルダーが主流でペンホルダーが少ないのは卓同に入って初めて知りました。

二つ目がYouTuberの「takkyuu geinin」です。卓球に関するあるあるやお笑いの動画を10年ぐらい前から上げ続けている方で、今も昔もずっと面白いです。ただのエンタメと思いきや、意外と卓球で役立つことを言っていたりもします。そして最近卓同で練習していて分かったのですが、この方は普通に卓球が上手いです。

■おわりに

運動不足を見かねて卓球を始めた家族がいるように、卓球は楽しみながら心身が健康になる素晴らしいスポーツだと思います。授業や研究で頭ばかりを使いがちな大学生ですが、やはり時折体を動かすのは気持ちが良いです。人間にはシンプルな世界で球を追うことに集中する時間が必要なのかもしれません。



↑中国式ペンの裏面。中指と薬指で押さえるように持つ。小指は基本添えるだけ

皆さまも縁がありましたら、対戦よろしく申し上げます。

(社会・国際学群 国際総合学類3年 結城希)



編集後記

2025年度のペデジャーなるは今号が最後になります。今回執筆した4名のうち3名が4年生です。私たちの代が入学した2022年はまだコロナ禍が尾を引いていました。マスク着用を求められ、オンライン授業が大半だった日々が今となっては昔のこのように感じます。それだけこの4年間で充実していたということなのではないでしょうか。あるOBは「社会人になってから繰り返す4年間で何をしたら記憶にないけど、数十年前の大学生活は今でも鮮明に覚えている」と話していたそうです。それぞれの大学生活を振り返る2本の内容では今の筑波大生が大学4年間で何を費やし、どんなことを学んだのかその軌跡をお楽しみください。

「しゅしゅっと就活」という響きの良いテーマでは、学生にとって重たい就活を軽やかで前向きにとらえている著者の姿勢が伝わってきます。「卓球のおもしろさ」では著者の経験や独自の目線を交えて、その魅力が力説されていて思わずラケットを握りたくなるかもしれません。

今号も最後までお読みいただき、ありがとうございました。新たな執筆メンバーを加えた来年度のマガジンもぜひ、ご期待ください

社会・国際学群 社会学類4年 川上真生



X (旧Twitter) で筑波大学の情報を発信しています

事業・リレーション推進室では、大学や在学生の「今」を伝えるため卒業生に向けてX (旧Twitter) で情報を発信しています。

学生の様子、学内の景色や、大学の取り組みなどはもちろん、在学生・卒業生が交流できるような企画を増やしていきます。

卒業生が楽しんでいただけるお知らせやその他イベントについても告知していきますので、ぜひフォローをお願いいたします。発信してほしい情報がありましたらお知らせください。

 筑波大学大学基金 <https://futureship.sec.tsukuba.ac.jp/>



編集・発行：「ペデジャーなる」編集ワーキンググループ

デザイン・配信作業：国立大学法人筑波大学事業・リレーション推進室

ご意見・問い合わせ先：国立大学法人筑波大学事業・リレーション推進室

〒 305-8577 茨城県つくば市天王台1丁目1-1

TEL 029-853-2030 FAX 029-853-6576



メールマガジンの一部または全部を無断転載することを禁止します。

©2025 University of Tsukuba.

 「ペデジャーなる」のバックナンバーはこちらから

➡筑波大学メールマガジン『ペデジャーなる』

<https://futureship.sec.tsukuba.ac.jp/alumni/pedeja/>

 配信先・ご住所などの変更は以下のフォームよりご登録をお願いいたします

➡登録フォーム <https://forms.office.com/r/0ndsbfM04q>